玉淵集

五

子 安12
104
方止

東京帝國大學圖書
利117
5
門12
104
5

音曲玉淵集五

一ゑスふりの事

ゑゝ前のすぐ拍章ヲ拍子ハ甚ヨ祝ヘト　刈寸分下ル心ヲ階之
光ヲ入レ

三　△武山すそをさひしき
ア
△立ヲまろ夜まちれて
ヒ
△世のからこれ

ヲ　△秋九風ハふりぬよ
江　△人ろ〜空ゑ低の為に
ヒリ
△爰ハ刈さめよろり

○一字ゑ一
ル
△光をみるこひる

光ハ下音の四ゑと
セニ
△初もろ風をと

○同ハ内ノ一字ゑ一

光ハ下ル上のすぐ章ヲ息を切りやうもて
次の下ル章を拍ク下ヘ一強く歌てハ不至

松 △雷とよぬきたるぬる

羽 △君が代八百まの松葉

表 △みちのくのあさかの

△ふるれて孫八

○二字為一

先八一字為て上よ佐つくし息ヤさげて一字為て後のさ為章ハ也も音も為ス

東 △たんひあき妻妃よかく

杉 △火宅を出に分うなく

松 △氏物語の利まて

○為ス上一字為てすぐ必章モ右同様の心佐ハ孫ハ

黒 △何ど波中乃

孫 △たりひたにの

孫 △えさり死本位

△時節も実とちまさり

○三重為一

冥 △老乃分れよりの

○行為一

天 △初て食むをの月

○居ハ為ス示先ハ落ス章ヨリ佐ハ孫ハ遠ひ中後まて必ハの

起ノ示ルを押ヘ返て階のきさめとトル如く下ヘ

百 △去のは物れふるたりて示も角まと孫ちけ人乃

三 △かく年月を送る分れ

孫 △かくれの方社りかくれ

○二字三字為ル示先息ト音トつれてトナ表次又ハ為ラトル

千 △面いせるれ妻をうくる

孫 △世上乃里に云よりく

角 △遠ニ久に月のまへのうれせ

松 △名もかつて知さて川ハ

三 △ちたりをこむへしと

ちりのけヨリト音ヨあ又

ま乃字ハ為ラさけへし

一二字にあつめ二字つめ乃事

花信書ニ一字にあつめて二字伸るを一字つめこいひ二字はめく一字伸
ゐるを二字つめて又三字あるゝ乃あるゝすゝ又伸るを心の矩に
たつを祝ものゝ婚ものゝなり

場 △かりゝ人界に　△中にむさんやか

始 △たゝやかゝ本の　△ゆゝねるれのをハ

光ハ二字詰之但たゝトヨスルニ派スつゝなゝかやゝなゝ引て指ゝ拾合ス

又白切のゝひくかゝ二字詰といふなり

千 △今ハあつさうゝよゝちゝかゝ　△ちゝかゝ

光も引トよるゝは派スゝ引を衝もゝを長の結ぬ結

よつめて白を切次つゝるゝ但ちゝトいふ不の千ゝよゝかゝひゝを
又ふ祝ものゝ爲ものゝ二字詰といふ不

ち △それも久ゝ知名ふ不の名ゝく　△ち名伸ぬやゝよつむゝ

仏 △本木を仏ゝるやゝんゝ　右同ゝ

妙 △妙ゝく文丸心ゝ本ゝのゝ　かやゝの不も引タル詠ハ二字
ツムルゝさふあり

伸ゝ風ふゝ

石 △嵐乃色ゝ　拾ゝ長派ス

切 △修羅乃ゝさちこちゝ

一流ハ光ヲ引トいふ

一まゝすゝ乃事

ヒスふゝハ章二つの心之上ハ亞下ハさげ　○小ヒハよせる心

○中ヒハ上ヲすぐゝ拾下ハ高りさけの心　○大ヒハ章二つの心

初ハすく次ハかと上ケテ後ハ中さけの心上音下音を　○入ニハ上ニテ入
下ハ南ル公　○又上ハ去下ニテ拍子先ハト吉まを引也・
ツ　△秋津洲れ玉しめ給　いたゞき角ゝそ長を折心をへ
芭　△見ぬ色のふかきや　仏
禅　△実や流をてハいりもれ中の　舎
なれてはいりもれ中や月宮が
古き寺井ハかゝく西ハさん
ち　△来れ来夜のおきぬまもれ松風　先ハ中ニまて下へ高サズ
上ノ章ニ必すくと
ツ　△をさ紀乃ちも寄をぬ　先ハ大ニ引と
ち　△思ひをのろ斗ありり寺　先ハすへニ引と
曲章のうるも同

中こ如て　貴ハ拍を
女　△父をかさりつゝ城ふくみて
ち　△たまをゝ命ある
日　△末代のためしも
三　△ちんやれ〇の記きハ
ツ　△関路乃ゝも声くゝて
ち　△かすを城をめく
日　△下化衆生の相を得ゝり
日　△煩悩にくりとおゝろん

此たゝひすくてハ熟ー居ニと
ろく止へー
先ハくり引ー
入ニ引ーと角ヲ性ニ南ルへー
先ハ引ーて下ノハラ清と但清ヲ
陰長ス祝ひ事分詞ス公変へー
先ハそ〇字ヲ清く拍ル示右同
双ハ引ーしかろく引ス
此たゝひ上ハちいさく入ニ引ー
下ハ引ーあゝと
右同
先も中ニ引ーと但上のろノ章
ツノハ別ーて熟ー

右同たゝひのノ字ヲクハ処

先ハ前の指よへけて見ス

先ハ見て祢をお

右同

一下ルふーノ乃事

胡 △よとの水面も行ハまさをいつるそまん

中トラ　あらけ　文字　位さけ　ヲトス　呂

松 △村雨も社のを

胡 △後に行方の

1ロシ分てきろと

松 △行、年代中絶

井 △て、誘れあもをこ

中ときろと

□ △清ちられなきつあと

う △系ハそれなハ引、べ

先も中さけ

チ △実や世の中ハ

さ △安永元年玉あ化や

上の南ノひくき

まてさろと

セ △行未とつのれあ

西 △あ〻〻さ〻〻れ

ろ △社さて末後のちまをかしよ

ろ〻あさけトハ

息斗さろと

方あのこかろ

比位さけハすぐ章ヲ埋て其トニテ高さん心ヲ含之巳スハ章ニッの心

ゆ △こてろよハき

ヲトスと

チ △せめをうろ

△かゆハうんを

△志ものたと知ものろ

呂さけと

○比トル章少トリ知ろゆ

さ △まよひのもも

△志ものたと知ものろ

△ていかろ〻ゆ

柳 △きされら弘しまの

セ △せたの長ろ

△神とそてこの

一ノム章

三 △かゝろ引きハ　花 △たゝくくてに　先ハ大きくノムこと

百 △おしわたこと仏 上ヨリ文ぐす間ハ　△南無ほうこと仏 トヨリ祝ケてたり　字ハ下ノムハあさび

百 △白もゝ丸ろくこと　清 △清絵ろ丸ハきこつ　小く春こ

柳 △三吉姓の　チ △れてたる花さく　文ヲ付てノム

立 △語ろもすゝ　忠 △其たをたゝなこ　入テノム

モリ △比文ろこちくは　先ハノこ入ルふしヲ裏ヨリ祝ふこ

一レ 比章ハ後息ヨリ陽息ニ立

山 △鶯漂れ多をとあ出せろ　赤 △何とたく

松 △悔やきころも　先笑ハ巳ス章ヨまろ

一 比章ハ陽息ヲ上ヘ南ニ　笑ハすく章ヲ巳上ろこ

至 △矢一川来つく　幸 △家特ろ双蛾も

山 △ねすこれ涼谷やな　先も巳ス章ヨまろ

一かさあろ章　比章大こ下音ヨ高ニ息をソト分クルこ突ヘろん

ルヲつろく出せば息もろん　又ろ章ヨまろ

山 △形をけつまかせろ水ろ　ラ △こ間のそこる

幸 △ゝ和雪ろあつ巳　も △衣れ玉ハよもかけ

一ふり引

少 △東山せあく

十一 △ちやくまくゑ人声

十二 △相人なり

十三 △大天狗あり

十四 △尾上のゆもひくあり

十五 △月よなけ

十六 △ちとせを経くなり

十七 △ちあ後せぬ名ぞたり

十八 △南枝花初て咲く

十九 △それハ老う新

二十 ゑ上音まて引て押へハ

二十一 △青苔乃地

右同

二十二 △密夏のたりとう那

ゑ上皆上音まてハリてあて引て

但ヲ中へ

二十三 △すゑ遠ひ名あり

ゑハ下音まて引てあて押へ

二十四 △夏之も花を書ろあり

二十五 △あとろ景こそ伝ふあり

二十六 △十かへ里ふ紅ゆちりけ

二十七 △ちをたしまぬ

二十八 △ゆあそ月をも

下ノ二ツの章ゆくゆくと又よそそあると二流ゑ

二十九 △あけをあく

三十 △ころもよたり

三十一 △仏乃法名を弱そ

此押へノ章并下ノ章四の板かゑ有ゑ張ゑてまそ

三十二 △ちあゆれちまくハちハそや

三十三 △すゑしきたハたのかりや

三十四 ゑらハ下音ゑハルこまきゑ

三十五 △ひのまのよひきゆとち

四十六章目前ゑ

三十七 △ゆりまユリのゆり引も押へ

三十八 △音ゑをゑはのみちひなれ

ゑハ上音まてハリ引て押へ

長長そゑ下ゑ上ゑ

三十九 △かけハゆゆ

四十 △ちをもよたり

ゑ上音ヨリ下音へゆる場ゑ

一ゆまこぼし　ここ　五章　元ヲ文　皆中音之

田　△月よりけ　ここ　十　△ますれめや　ここ　十章吉

十二　△おとのそれのみちり　ここ　十四　△みこのぞへり　ここ

十四　△をしへ焼しきたのみち　ここ　十四　はふしも右ト日ゆをこぼしあるよ

はふり列まきこり

十四　△梅衣不捨　ここ　もゆりこぼし三絡

一中よゆち章　八ノ三絡

十七　△二十五乃　ここ

十八　△ゆよ姫めそて　ここ

一たけくへのり

十九　△人ころや　ここ

是ハ八ノ三十章ノ心之

也して同しみれ四ハ皆たけくへと婦よりあり

十九　△世くれ山れ乃とくまて　ここ　十二　はこうやうよ孤よ

十九　△あひとりふことも恨ことりよこと知なしへあらも

夕　△えしとせすとおうしの名をも香をも

十九　△人さこにまりきりあり　はこうノ章皆為て恋ふ乃おとやうよ相を有へし

一三河乃　先ハたけくへ丸類之同しやうよ孤よを婦よ

楊　△きにや六家のうんたいのかんきよくれ

井　△たのむ仏乃みてのの糸

一三字つゞり　先ハ婦よりこと

三 △うかりをかりゝ氏うこハ

井 △二生にたゞしゆへ悔きや 吉

右同

一三字さゝり

小 △花見車ゝ爲くより 一一吉

山 △人を助るゝきをのこ 一一吉

井 △見ハ氏あるりよ位のあり。氏もれか乳吉系乃ありひゝハ。

おたに名をあゝ人なり

羽もりやうの示下まそ三字

さゝ爲ハまゝくゝ

一三字引

先もきゝ下ゝ

そ △さ爲よあゝ

はゝとあやゝ三ハ悪たヲカゝず爲

字ヲ加てよ字ヲ引吉

綿 △たゝひよ内示に

先も右同公ゝトのやゝ三悪ス

新 △まれこそ掛の

先三字引乳に掛き字ヲ示加

エ エ かり

り △ゝ爲川てう南校よ

先エと延ゝ故三字引ニ付ス

先ウとかれよつもへゝ

一序の二字ハかゝく出すへゝ

遊出ゝの二字ハかゝく出すへゝ おゝ氏ゝ未迄共位よ引きてゝさ

爲くゝ先ハ悪先きゝ序

一字ハ清ぬやうよ口の内そ強ス序乃字をゝ島をこめ立て序の

但一セイ有ゝの乃りて知ゝ新ハ番列ゝ

む まゝるは悪ス

国 △ちゝ涙やゝ爲ゝ去砂ハ

三 △山てゝゝ表の

千 △あゝの者ゝへてゝそゝゝ

た △ゝゝに一校乃

先引音の字三川はきゝたゝ示茶乃長表字

一文字送ゝり

をすゝ紙くゝゝへゝゝく元ゝ行ゝ那ゝ乃

り △せゝゝやゝゝ夜の雨

羽 △ざよひやゝのあゝかゝゝん子

一ゐろは　ゐ部

二字はくけてひろはゝ悪し　二字続えろはへ仮名ゐ
きひろはて記ろ仮名へ仮名へ文字あをくハ悪し　仮名
ちやき形はも二字てこと仮名へ

定　△ていかつ引つ乃

ゑ　△双林の入滅ことくを

安　△ろく名ロを乃ゆろ

一ゐろはやうまてひろゐ仮示

三　△すこひきあくを

一よすが　先尊も二字てくまへ

江　△まくをあへ

右ひろはハ乃一字をおゝ引。ゐるハあ乃字ゑ仮ゐ

一をうゑ姫　先ハふりの名なり

角　△ゑをうくうてたゝ

三ゥ　へかとあくつの字

一文字をこひ乃事

をうゑとゝ仮耳ゑ入ハ却て悪し　只双ゑ文字れあきてけゆ
ゆやうをゑ仮へ　世文字をこひを三字とたくけんゑ耳
ゑ志也手竟四ゑ文字れうを乃と仮得三字双ゑくゆ耳ゑ
たては又をうゑゆも三字ハ耳ゑ　仮掛ゑ乃　ちひきハ名別
一也　一て、ト字章　ト已ス　六九　一九　八七　先れ　を志きをやく

天　△仮も却ゑれをゝ乃

右ひろはハ乃一字をおゝ引。ゐるハあ乃字ゑ仮ゐ

一をうゑ姫　先ハふりの名なり

三　△ゑれも五濁れををて

一文字をこひ乃事

天地ことゞゝの世界の文字うくゝ色ハ陽九陰ゆゝ也
陽をたすゝ第一也

一ふる章〳〵　柏ノ葉〳〵柏よそつゝ

○フル章ハ柏よりかゝ○ヲス章ハ柏よにゝらん　ヱル章ハ弘を
すぐよふり出ゝ又柏ノ葉ハ

夾　△まゝ実　浩　△まゝ一門　柏ノ松合ゝ

玉　△くゝふかゝ九の　玉　△くゝふゝ　白ヲ切ま〳〵九ノ
松合ゝ

玉　△うゝ九ゝまを　井　△ゝゝ井角　ニツ地の文字ふ是
九の松合ゝ

ゐ　△鑿ゝ小舟ゝ乗て　夾　△まゝに押ゝて　ゐのあやゝ松合ゝ

百　△えゝいゝうゝえゝいゝさ　月　△井ゝ九里ゝ玉ゝ　柏ノのりてかくゝ也

百　△たゝゝ九ゝ乃　右日クリかゝる

ち　△煙乃出ゝかゝ乃よ　夾　△あゝを九ゝ乃ゝ　柏ノよりて松の内まてかくゝ

田　△風乃ゝゝなる　田　△地ゝ九ゝ九ゝの　色も柏ノよりてかくゝ
てかく所但下音
まてハ以ノイロヲ
うくるく

百　△ゝゝりかゝくも　卒　△ゝゝうよりのゝハ

ゐ　△心を友ゝ　ゆ　△さゝゝぬ別ゝ　柏ノあきホゝ

千　△情あきゝのゝきゝふに　釜　△ゝゝゝ乃ゝ情や　右日

一フルトヲストの月九章

百　△たきゝゝゝれく　月　△父大ゝ百ゝ　柏ノまゝ所但ハヲ条ノ下ケてゝ所ふき章ゝ

佐　△ちゝゝをゝふ所　佐　△こゝよひの秋ゝ風　サノ　△月乃ゝまゝよ　色ノハ一ハ章ノ
角ノ

田 △今ハ何をか　る　△むめまつと

一 ヲラス章　フルヲラス板ヤよ元別あり　ヲル章のおも紀抱こ抱よこ〳〵
る　らず呂ゑも抱よ合示のよ

△こゝ所の浦よ元たゝり　△秋乃むしれ

△ヤ胡ゑと　△末代のため

△立よ飯ゑけれ胡ゑた　武ゆよの章フレぐ抱よおゑぐこ
ヲス章ゑそ氏ヲさぐるゥ吉

楊 △ゑ氏ーまに呂ゑたり　△ゑも扇とまゑ〳〵あり

田 △ゑよ流きたる流ゑれ　武たゑひ氏ヲすくよ生てヲこ
ゐルゑ

刁 △大些氏ゑを有ゑき　紀△ゑまゑく些氏日ゑけかゑく

右 ふゝらゑきゑれ楊る　キリよ有ハ大ゑこヲス章こ
たゑくハゑるもこ

志 △年絶ゆる事ハ　先ハ抱よ有ゑ示こ

田 △ゑ沼の水よけ結ー　卒 △新れ玉ゑゑくくゑ

一 前をー乃事　古書ゑも有

二 △孫もせぬゆめと　先を前をーとゑハ孫ノゑの章と押
南テ　もノゑの章を呂ゑぐ所ゑ有り前の孫ノゑまて祝ゑ
前をーとゑれたゑれて抱よあひなゑる

巳 △金系のえさに　宋 △非本と田ゑ所ゑるゑ

一 白髮ゑれ事

ゑ丁ゑ乃ゑこゑはれこハゑー城
こ所よゑりて巳よ人ゑなゑ

春風や月も夜くけよろつ時は

さて〻色ありとこ拍子ひ物色―

此事よく考へ― 融のされこみゆも 色も白声元

一曲を忘れて拍子とられ拍子よかま元曲を覚こと

三 △今たりひねの爰たまも 物の集こもノ字の引佐の

ちゃ爰やうよ拍子を教へ―

△名残おー乃都や 物 れむし― 物の集 ―きりくすの

曲を祝ふ示

△首のかゆ―をつよられこ笑ひく 笑ひての所 拍子をやふりて

うふ

一ちりゆ羽乃不声をちり物ハ悪―

△あ〜かうり たーれやゆよやな情むへ―く

常七年の初かやうに羽のきゆ帝こ清たりまてゆへ―

一羽子髪上りよ安元不のゆ

此 △法乃をへ元 法ヨリ法て刻をノ字ヨリ法元甲ル

井 △ゆあり平の 元八者ケ元ヨリ ウクユヘ甲ル

△花ゆ元さいを 中元元元元

△いさゆ元ゆ元 ト元元元元

いさトウクハ悪

ざくゆウク元甲ル

て〻章さけす 物トスハル元甲ル

悪 △月ゆさろよ ト元元元元

乃〻字ウク悪

△かくて物に ゆ元元元元

三 △ちゆくめ元ゆ元元元

△ちゆくめ元ゆ元元元

先ハ者トクリテくモこモさけす

うふ元ゆきヨリ甲ルこ

一イロのゆ ホ ト羽トまゆ元シ云

京 △能宝寺 数絶宝のやう

ウ △武河のあこにたうとゆ元

此 中イロ △ゆゆれの雲のさまに

羽

此 イロ △いたあまゆ元 羽 旅

一次第乃事

先口伝の様ハ後言なるは吟強く進む位也始終
たるみなきやうなるべし次第の廻り白切ハ白次の如
く有べし乃ち次第ハ位大根遠ノ様なり

△今茂始めの様衣　いたくひハ乃ノ字ノ章下ル故ヨ様衣ヨリ又ハ心　根くひころもノ
ヒノ字ノ章下ルと先ハ廻りの今ノハノ章下ル有ヨ式ニ
ヨ下ル定例ニ

△年立海ノ事なれや　いたくひは ノ字上ヲ巡スれるノ字又ハ心　根なれやノヤノ章なる
先ハ廻りの年ノヒノ字ハれ式縁ヨなる先次第ノ定例ニ

△風も静ヨなり乃ち　いたくひヨノ字より心やうヨ定
なるハ廻りなり乃ノ字ヨリ又ハ心

△ひなれ初源なて事く　先も源ノ字ウクハ廻り
廻ノ字ヨリ又ハ心

△日も行末を久しき　しノ字ヨ拍て。知ハひくきヨ心
（氏ホ拍ヨラフノ風ヨ）

又一流ヨ。しノ字ヨラウ廻びきノ字ヨ拍てすなるを但ハ式ハ数
数定まるヨ其一流の格ヨ廻へ

○一説ヨ行ッ次第行ッ次第とヨ次ヨとヨハ不用ヨ也
次第ハ其異ひ立一番ハ余情をヨなり

一名所乃事

口伝名所ゆうヨむ也名所出ー少イロヲ付ル
△そもく是ハ南今ヨ住へ（イロ心）なる所下也
次第なる大臣口伝ハ草（サウ）の大臣とヨ真（シン）の大臣ヨ・抱
次第初きハ柿（カキ）といふ事なりヨ先ハト名所出スなり

むかゑを分ていひ出すべきさゝれを祝のまゝ遠乃
やうよりやめも也 扨して名乗よかすり 初きハ中ノ小ノ
概爰ニ天被あるの如きもき名乗ハ文句を考へ
仕切をして祝へたあるれを口掛よに遠るおと
むさ立祥（タツハイ）の示あめうなるぬやうに又まとくしく
をなれやうよ有べし 大臣男ロキ（侍）商人山伏位俗（位倍）
法下うつ母信皆をれくよ弱面へ

松風ハ名乗の名乗ハ名乗れてきよせを乗る 素祝ニ名乗
セリフハ祝ハトよへうれセリフヲよトゝ云へ

一一セイよて出るロキのゝ

ゝをおやうに進むも也 ロキノセイハ男
ゝをヨリ祝出ス 名乗ハ大ゝより名乗也

羽 △風をやれ三母乃浦まと（後）△をやるの乃ゝ母

一道行乃事

次第ハ吹と位をたゝぬやうよ祝へ 但次第より女
かゝきゝ乃ゝ歩行乃祥乃ゝり起乃ゝ乃也むゝ初の
一ゝきりハ初ゝきりて祝ゝ切ての後か掛ゝ也席ノ二字
掛く出すべし又祝出ハ北二字めゝ申と又申すてハルゝ
の分ち掛ゝたゝきやうよ有へ

ア ア △ゆめよ祝く 章ハ二字目ヲすぐまさ 又流ゝそ二ウ
ゝあめよ祝く ゝけてもさん祝やうハ日あなり

る △たびこゝろも 氏たゝびハ二字目より八

無格ハ小祝 祝氏を日あゝ長ゝまも有ゝ

○乃行の間よ一白絞乃ゝ示たつゝ上まるゝふまゝ知乃り

朝 △牧乃末ハゝゝみ山切（一引）ひとの 江（）ゝの川ゝ乃末ハゝゝの

○ヰ切の名すうたひよハヲクリの名の如くすて遥出て吉
胡 △うちなびて（ニヽヽヤ切）未よ伊吹乃 ホよす佩のあふき拍よあれ
もロキハ先かとよ
○乃行の末百第句を切不必下ル章のよ 待謡も同格
あ △敷妙空も迷つくや（ヲヽヽ 先下ル 定格） 江 △松乃名ゆれ波をする
先行ノ次ハ一字下ル法よきハ二字下ル定例と
さ △見もみやこうはのくふか乃 ヲ △月ハかすむやみのをゝ
○乃行よ中第まづきトロよす 先を見ゝ乃行つ為乃ともよ
ち △高砂乃浦よ見たくりな先 ア △里近けあるかゝの声まぎ
一ロキ名系セリフ色てサシの事
先ハ皆さゝ声とのゝ公ゝてハゆられて無勿論敬ジ

詰てうふすもかくれて其答と
世 △もれ出来よ未てみまは 杜 △きにや光佐てまゝん
一ミテ一セイ出端
服能ハ主ニよりて出ル其外ハ其風の位ニ考ヘ
板素謡かとに必ロキの風を詰て風出す所甲ゐル
なりミテハ改てよき比の風よ出すヘ
△尾上ハ名も引くくなり 世ア引陽色よ引ヘ
佐色なれを末下ゐよて無理ヘて一セハ同しくサシ
声ハ第ヰ上造ハヲ ヘもぶくお紀やうにちくくせ
詰ヘ一ニノ句ハワレすてもう無およ風ハうん

○竹生島などハサシまて出るさまこと也へし

○次第て出るさ ○他国物の内より居れる 楊貴妃 安達系

○舞臺へ出て度〻ていふさ 三井寺 ○橋〻まより孤て

出るさあり色 せいさ十 皆それくゝ乃公物有へし

●サシの内ヨリ此より多くさ ふ 但外も此例さ

表 △白況の事ハつめきとも

の若しそれヨリ少ク有共此ハ未日例

白 △かくやこ思ひきてきこう 田 △三十三分の秋の月

立 △ひとへに菊社の内少へなり 系 △みゝきにより〻てなり

る △松風をのこ少なれく

此たゝひハトヨリ世字同角きげこ

十三 △ちかたてこれ日のかれ

志 △物毎ゆさきる西おこのまへ

壬 △何めもますやこのうれ

一サシの末切よかく必ず下音ま孤へも陽息ま引こ

る △思ひをのふる斗なり

三 △つきぬや法の声あゝん

一下ろれ不初ヨリ引ッきりの事ハハやし 此こよ乃公有へし

一上ろ小塩序の二字れ乃ハ乃不ま記ス同前

△こころハる砂乃 「氏引居の二字辰巳上りよりぬやうこ

まッすくま引へし

引居ぬ訓きの〆めを音にをけ
初心のひくきハ謡ち行られ

○小謡乃返しぬ木つ書を付ハ謡をえらりよ謡りせ太夫体ハ
なり語るヲ羽衣の口キ或をせみ丸俊寛のヤスヨリなとの
たぐひ体むハ僻事也体ムハ大夫計なり

る
△今かうへて
こ々め次第にてハ　此まぬる章ハ悲く息を分ル之語るヲ　ニ
出し分へし下ヲ謡よく実出せはいやし

○キ切ル小謡キきらぬ小謡といふ事を中ノキ切の事之
キ地よ出ルハキ切ル引立て出ルハキきらぬ他法なり

る△今かうへて切　行いつ迄か　△世ふれ第夫衣切きてしも
井△秋乃そらヤシハ松乃声　△衣乃玉ハあらけしヤシハ第れ
安△杉を立出てヤ是や此ル

一謡をよミてのす
花伝書ニ　太夫より調子をめしてうたふへしつけ合し
うたひ出るを次文字一句か半分程をそく付るなり太夫
と同しやうに謡ひ出し此うへんとたゆへる謡出しそうハぬ
おもり付あひいうかも一句口まで謡ハ根よりのそこやうに
急しなむ返しおし太夫なりをやく謡ひ出すすなと
を恥辱なりたとひ太夫下手ニよてつまし上手なりとも
々夫へ付へし下を　独して謡れ一人うたふ木ハ味ひ

かまへ記事略くさうまと孤ふへしテニ准へるべりの
ゆ未熟の人望なるり但一せいの二ノ句ハ序の日なれ
ども一ノ条相ゆ有へうに付合のすそとへた
△松ハすこしを一それうも三人かの行詩ゆ此もノもノま
を引又彼ノかノ字ノ聲ゆそうまと引て出
すハ未熟ゆゆのえひとノ字ノヒヤントかて岑乃句切
ゆこと句を切てかノ字をも引ず一人孤ふやう
ようたへかるしんそうなり後ろうかひをえ後ゆ
付ゆ方ゆるく付ゆ花角そろ花枝ゆ
くくるゆ記やうるしてうかひ後ハこテノ孤ノ
元入て耳ゆてうしうふへし也して一人孤ふまりや

むつしきゆなり

一浮ゆけまて出ゆ
ワキ遠ひくゆ乃ゆハ悪し一素孤ゆえ長伝孤
出すへし　△ふくく初ハもくなハつむへし後の
噂ノゆ乃ゆけぬうちゆ中ヨリあれゆと出すへし

一同答乃事
ワキハ声を主とす面不多一を丈ハ音を主とす不れ
ゆし是伝陽ゆ孤ゆ別なり ワキハ陽ニテハ後ゆれ
ゆ丈乃方ハうつゆを主やたワキハかろくふうり
て孤ふへし但シテまも弁ゆ或ハ思かとゆうまゆ
ゆ是くゆ相違を考ふ也

○無して能よて歩こうくいの所ハ羽よてもかるる味
を素祖よても其公ハ有へし　先さらの羽の内ハせ
くと心ひさかさを指元へし　但それもるねけ有き
やうよ待指へし　ふしよ無くハ一またく無して後ス
公ハ指元ることハ文字ま命かけくうけうり法ま詰め
今一句就に物てハうひ一まつてうけて指元たまる
やうよすへし　但文字教すくあく後す所ハ文字ま詰つ
まし物やうにろひくこと後へし
伽　さくらう　花ろノ如し　又
上ハ　早うまう弓あろ　かやうろ所ワキまり詰めす
沙汰ろかまり有り無してミすへ但吟味して後ス事

有まくハ句指後のヲトス不將く孤ハへし元ハ別して
無し
忠　ちろ元うしろ山里よ　ふるくさ山よ　はよノまよか公を
右同公
○同答の内羽ようろ風不羽をいひて古の上ニ文
字を重かへて祖出さるひを心をしあく
七　へよき人ろ人数も又。栖ハ　揚　玉元并元生てこうこ
○ろ羽ようはろも同公
江　かまの岩に羽公ろ　初　ひゆりんよあふ異ようり
○立居行かへまの不他ま所ハ其公ハしてかるシ此へし
礼　武方へ元入へ。　光こ元平名信　村　ちて寿へし。　ミ　まノく
サ　へこあこへ元入へ。　甲　支しまちえて

○ふ一のかけ合後一口かゝと文字をちゐへて後すべし　れ
ら母ゐとハ行ひ共仏れ有べし一或ハ文字ようり行
を詠うつるやうまして後一清元方もうつして清元
へ一まに共あまは同答謡のくゆても面白きこ
芭　△つちもくさ木も取よりくろ一うろの表こを
呼れなちぬ有信此情もしものつ
○起一てシテより口キハかすむ心よ祝へ一ワレも日あ
勿論声ハ撥豆お遠一てハ字ふくきあこゆくく
始終ちぬけかく序役忘れ事こ
○同音へ後すホ中音ま後スもあれた大概ハ呂まて
後ウクハ起一一字二字下音よりて後す所

板ハ表下かく神ハ必ウク也
功　△ちゐ千春ゐ彩方今ゐ　井　△むゝ　おとこ乃
定　△おかゝに
社　△今ちゐよ
　△三川もなき
商　△ひさゝ乃
世だゐ共同音へ後一方長く引て後す九ウクこ呂
志ゐへ千まて後すべし一同音をたやく清元へきゝ
引心よ結ゆへ乃ぬけ乃ぬあり
一神楽の同音ハ乱謡よ依て速速ハれとも是大概去
川ゐこ概同答の表ハ後こ体まる九共仏おゑよ多
位よ必表も豆ハ声ゆあを同音それを清てハ甲

ゐるこ同音ハ横乃声よりあをして付へし又同音訊
出す二字同氣こ字同ようキ上ルあをとこを押へ成仏
有へし也て同音ハ横乃声をもに強ふへし横物
ハ亦とう法皇安し墨衣物ハうつり難し

一訊函よりあふ　乃ち小訊信訊等

二ツのすぐ次仏ヲ多よりある　こ下さぶハ押仏ニテ二字ニ作る

○ちれ　○なり　○ちり　○たよ　○まを　○やん
○さん　○まれ　○ゐり　○ゐ　○まど　○たり　○たや
○ろや　○ゐや　○しや　○すや　○する　○ゐり　○すん
○ゐるん　○侍ふん　かゐのたひすくトル云ふ色
ゆ　○よみしの社義ちれく　三　○なくゐをさんたく

七　○法行妄芳と次よりく　志　○右しくその方とやく
大ゐとすく章よ次安し
一詩言を吹し　頑和類仮文字和語ハ少白乃有
ゐ吉引付ハをゐしかゐて
一ふこの頑出し　ハちゐとをみ出し下音よりかて
ちゐむる仏有へし
一くど和ハ序の位こ乱をてゐる糸をてく如しとて文字も
ふを使分異くかれやう訊ゐ和ゐやうよ飛仏し
声出る文字ハひゐ和ハ悪し　和又を和ハ下音傍
次和ゆへ指ふ安きこひハをゐの仏れ番く文くと
和ともに呂へ云すふし此次ハ必かろく出すへし

きゝくハ長文句を見合せ仕切くゝて言たゝけ
まゝ村立まゝ初之句切長を慎て切慎て出すへし
一盤之かゝの絶文乃業ハ句つゝ続へし立てゝきゝ空
くゝ化気味あきはまくゝ如之位拍子有示ハ各別
一語乃事　きゝくゝ之文句を考お遠ゝ語へし
○シテの語りハ上より出し甲しかし
○ワキの語ハ乙より語出シ甲しまゝ語る　古書ニ
初ハ句切もゆるくゝと長延しをいひたかし
ずかゝりハ上をかすゝ下ヒゝ下をゝすゝ下ゝ
先ハ名乗語詞ゝに文句短き所とゝゝ長ハ
と性ゝ下ハ定まゝ文句を考へし句論

ゝき語ハ所ゝ仕切をして語へし必口拍子遠し
はまり語ゝ地ゝゝ上場ニ所ゝ
ゝし式ハ出家ゝ語後会伝ゝ出ゝ曲舞ゝ上場ニ所ゝ
ゝゝ遠れぬゝ拍ゝ怪むゝ有り
○度愛ゝ乃語ハワキ方の業既之先語ゝハかゝる
とゝゝ語ゝとハゝ入ゝ語りと好まれてハ
ゝ所ゝ風ハ語ゝ有ゝ才一芸座席乃相
意ゝ合文句を考へし
一先乃いひそぬらゝけて孤示
三月ゝ加ゝハさえぬゝんしやあく　一字後内へ
ア　みゝめをいゝやゝらゝ　ゝゝ出ゝ

ぞ△あむ所ニ紅し（シテ）あふくその
一 乃川二の事　浮沈ニまた飄
○シテノの川とハあるまじ　両月護法未也乃川とヲ
上衆と神祇宮の差別分明也
○ワキノ乃川ニ真ニ花やかに有へし　すこしめ乃祝
祈念の祝分別有へし
一 祈乃事
○葵上飛鳥谷行調伏等ハ　それくに分別へし
一 から乃あ同音も川ニ於も有也脳能も有ちあくハ位進
むへし　たふむハ第し
一 くりの事　れくりともりかするも（シテ）ト同音ノ分ち

かまたかわ差別也　梅くりとて又思れ調子にかく随へ
きヲくりとるまくまて　かくまて〇ニちらし折之
○上くりハ同音の所ハ中ゆり一人語ニハまゆり
○下かくりハ一人ハまゆり同音の所ハ中ゆりもまユリも
有但差も定格也
○中ユリまユリともニ祝言ト　かつら物きけ有と地
当世ハそれにかくりん
一 さし乃事　さしハ謡の如しと又
○鼓打上候してサシ飄ひ出す所りゆり乃内ニ鼓打上
候とゆり仕回く打上るを差別也
○くりにてハ位調子もちろく於付に同音上つりてあく

波すをそれを待てウカと飛出せば辰巳とりの故なり
サしまて能比の調子を表出にへ　浅ハすうこひよぶ
ろえのす
○さ　ハ音の拍ひ拍くしてひこ乃うち鼻筋の通り
まて息を切下音よりてハ文字を詠へ　起　てさ
ハ文字をこひ何さやうに白切息次せりうん乃ひや
かに調へ　又音ちの内下ル章字毎よがくと
下風も変ふく
○初より下音まて出ルさ　ハ白髪二人勢之
○さ　の下音に而不必為ろ　浅調子ゆ
世　△たろくへや爰の世と　乃ヲとりて不ウク故也
又世と　二字よせてウク故之二度よさぐる心吉ふみうぐる

如くよ一板に為ろもすふうく　仕　下音よりして拍ろう
よ係てうりと下ろまあくうゐやうに公拍を切く
出ろ所　拍なくどうれと拍く調へ　余も此格
百　△実世の中ハあと浪れ　此中ハのハ章ゐあ為
下ろてうりと　ハ　実ヲ入て実へ　かれの不ハ文字ろうり拍
もかまはうゐやうに押へ白を切　を風へをヨリ拍く
○ちの内同音乃不よ八ふを不乃りて調ふ　初心の
毛ゐり位乃ふ不ハちの末ハ切の為ハ早拍よこう風
故調を其気味ろを左ゐき所よて宗う風ハ行すて
巳　△ちふのいと引為ろ　ヲ　△おうしう拍ハ
千　△いく田乃川よ　と　△乃ぐけき表の　廿七八
無し

○敎の内ハ君臣ノ役を重ずる不ことを異ひ合さ
所故將くとや侍へハ仮さしまあとかりるとの飛
やうもおやうもを見サこの多ひと
ハ声やさしことまそも敎をは
捨ず教をを異へきなり
○さしの末ハ切ハ所まへさきしうに向く飛
へ[illegible]氏所タヲ切て巳章 呂ともへ
一ハ全て上ハ巳者ひより乃至ハ巳に必長次上ハへて
きくを敎も拍子て弱ハ巳なり末樂なり
少ハ見皆世上ハ有さ毎なり 中切 下ハ飛ハひ
出ハ巳ハ巳をせんを 中切 下ハ安永の

一曲章乃事　をまひハよどみのかしとふ
○先序の二字ハ六く生すへし　おりけまを長さうみ
末まてひくくと仮ちするハ飛ス
一字諸を切ハひとかを二字続ハ
仮ひとかしを諸ハ二字ハ
○文字を重ねるハ
仮見ハ也一て曲章ハ所仮ハ
やうハ飛ハ類ハ
○曲章飛ハ一より初の上端ハ序　足ミ序敎の心
をめ乃上端より敎ハ上を敎ハ破　太日心
仮上端一ハ巳ハ中の中切ハ序を上を敎ハ破ス

後の上場よりを急まてハ　急　日序破急の心
合せて九段を段に心を付る事　肝要のよし
序ハ三段破ハ三段のみ得を
急ハ序破ハ段ひとへ
○花信ニ　上場二段ある曲舞を二段曲舞と云也
き曲舞ハ上場を一段ある曲舞を段ひと村
有るものをあるせまきに上場を二段定め
ぬ也　式定親ハ曲舞ハ位をひくめをしめ
上場をおりし段の上場ハかろく上ろ也も陰陽
乃心也　地別上場ハ位袖乃字二段段ろく
と上ヶ後乃字引ッをひく地へ落す事也

ゆひあり上場ハ上場ハ上ろ位ハ地ハ地ハ
長心掛肝要也　地別ハ地ハ地ハ早く地ハ
上場ハ上場ハ一大事ハ地ハ地ハ
地別乃位ハ地ハ地ハ
○二段曲舞ハ位つまりハ地ハ
○立曲舞を指し長ハ地ハ地ハ大事なり
又上場より立ハ地ハ地ハ地ハ
ちり立又床ハ腰ハ有かけ有ハ仕舞の
方ハ地ハ地ハ位ハ
○居曲舞ハ地ハ門ハ帝ハ上場を口ハ方
上ヶ安宅板待ハ上ハ設上ハ乃たひを

用なるもの、ことをえへし　詞に細なとハ酒宴なれハ
行ふ様なるべし

○上句の第一くきりハ五もしくハ拍子を捨て小節く祝へし
又ことヨリ五まで出る時同日音ハ切れ如く勢めて二字
引所ハ引イカ、一字ヨリ少あらハ未一字まで引へし

○上句の第ハ同音大くと下ることを捨て祝へと上句
し入ハ切り声を元亜してとへし　但きくく祝ふ
あくるハ行ふ悪し

○上句ハ故忘れ位ハ敬ふ遊ぶ事ハ敬ふ遊
ぶ事ハ人心ハ但たるむハ法の涙りと

○曲舞乃末ト音ハ不白切の歌ヨノム章一所を表ふ

文字の内下ル章必ずあ〜うさ　たゆ〜くハすぐ　ぬも有

井　△例　△あきあを　△秋とみの

井　△井筒乃　△をとなる

玉　△どうなれ　△奇なるは

玉　△法のこころも

楊　△こひ乃　△あれを

楊　△それ迄も乃　△れえぬ

○曲舞の歌呂へ　△ス　△と　△歌　△ぬ　△乃　△第　△ぬ

△吋節も　△変　△と　△ふ　△ま　△こ　△う

呂ハもノ字ハ　呂ハ　呂へ　おちず

△神　△ん　△ま　△ま　△ん

呂ハ呂へ　歌　さん

○曲舞ハ　△ス　△ら　△歌　△す　△ん　△ぬ　△ら　△あ　△こ　△ま　△す　△る

△切　△ハ　△す　△ん　△歌　△ぬ　△ま　△ぬ　△ハ　△ま　△へ　△ぬ　△ら　△あ　△な　△り

○曲舞ハ　△て　△ま　△切　△ト　音　△ま　△て　分　△ね　△を　△を　△す　△の　曲　△と　△ふ

△とまきわすれめや　紅△かくて時刻も
○曲舞にて其侍まひはかゝ所よ左づきたばきゝてゝ
て△こゝこゝのひハ月も　楊△地うかゝ曲

ゑゝ　右左ヨ分

一　論義入事　こゝハ真之地ハ草と

くせまひより八引立て陽よ祝へ〳〵日音たゝみてそこゝ
味ひを考よものなり其竟曲舞乃つけあと耳へ〳〵
こゝハゆうくと移る地へ渡る所ゆうれやうたかゝく
渡す〳〵呂まて渡れハ恋し〳〵　極こゝそめより拍よ
京色てハ未よくそもぬけ所あなり猛出〳〵ハ公そうこ
拍よを拍てあまりひっそうに祝出〳〵中行ゆっうと

曲をうせ拍よ城引つけ公一ッそよ祝ひ地へ渡〳〵口
もうくと渡す〳〵　他そやそれを猛白つもるす色
開く心ぬへ〳〵　論義八遠君まて教長姫ゆへたくこゝよ
足傳分祝を中メ合氏あり又二所よ移んきあらハ
後の八彩公拍う風へ〳〵
○論義の間こゝ下まそ遠〳〵　猛よ不そこをうんき乃
曲と吟ふ強きよそ公祝を　強へそすきれ風
よなびくう所〳〵と八為り為八大きよいひうけて百〳〵
そかえうぶ公あり
市△袁そやく袁寂考れ　木△くさ刈りく　木考れ
秋ノカ△ろれ拍よく　セハ△有ろやく

御家こんをやすくゆのうて大さすなれ
そのようなる稚を初て　きや
うんきをはをえ　はさはさはさはようち
地をきくさんまるに寄へ

一中入乃事

楽屋へ入を始り物の内へ入を神ごとよりらい席まで
へも有其外子数を敬くなをれくれ位を考へ

一待謠　乃の祝乃云

○神を始乃れ祝ハ進ム心大格此強

○菩薩精灵等ノ始ハ閑と つよきも和も有

○幽灵を始うらひ等ハ志門うなり

○鶴を立て始ハうたひ出しの色を切て　度して祝ハ
そをきく　但うらひハ切こうくすく祝ハ

○高砂　三輪　松垣　巫小町乃たくひハ別に有に伝
て常れ始祝うすむ公あり

○乃乃祝を謠ひ下音ハて祝ハ不乃祝一くを
ロキ乃祝出ハ男女クセ乃類ユ
ロキセて祝ひ出ス也

天　△無ようひく　ト　ゆたうく　夫　△夜もすく　ト　南無ゆたを

○出端ノ　ヲセて左数ハ也地の不ハり祝出ハてコイアヒヲ
シテの祝出ハ乃やうハ謠ハ乃

乃　△如我昔法取　又エ　△一仏成乃

丁ニ　△ちやくまく色人者

○猶く乱の時待祇　胡長せんからの時ハ待祇ようの心
所不の男ひを

一後乃出場（こすと不越とも）

祇出し　女をうせ男をうせの字列を板敷のコイアヒトにたゞ
うをかの吹くこまにやメ合祇ひくだりをたもき出場よ
祇ひを仕切乃公物有へし　色去現左九字多考へし
かゞ屋をり八河ろ一セい敷すこし　き
ちをハ他りをのくうちよりり
他他りあり乃内をも兵何らうく祇ひ出すもを井角
八楽屋をり出くもあらひ日ものなり
○ちや笛　大笛し　（ちハ笛のちかあるこ）　を敷寸上て祇出ス

○さがりを　ちり指よるもを　を敷寸上て祇出ス

一後の出場祇色て寸上　義八ふきを　ロキうをふ不敷の寸上ニ
一二字かゞ祇にかゝはけてかろく祇出すへしてを
義してかと祇ふを賜ありとくきうふのなりす祇
ふも世格をてこテをそも出るくとゆうふるひッ分く
かく敷祇にうをへし

一指ふを所すす所乃事　（色ヨリ指よるのゞ何をを）
十二　武義の者ひ　ニテ　まさハ開るこのくれみうり
白　〈色耳をすまゝれうにつ　（色ヨリノフズ）あまはみをう乃

一年

○ちゝノ序　○序ノ年　○中ノ年
○男年　○神年　コイアヒ祇出て　もを寸上て出ス也

ワカの出しハ初何とかく拍子を敷うかろくとゝ飛ひ
後二句三句まくとゝのするを言ん後りじまくのする
を初心なる和なり素飛形の心持同前

兎 △さすとゝ乃引くん

薄の内地ハをて飛出スべし

定め何とかくすを下飛出しハ延しちのすへ

江 △たへす紅葉せいさいれ地引くん

羽 △あるひを引天ばみをゝ乃

定 △花もかのまひれ引ゆりさ為やか

ゆ △あるくく俄よむ為乃して 先平ハ地ハの内へうけて うゝひ出ス

一つれの薄ハ三度なり

一かけこ 神楽 がく カケリ

地ハ高して飛出スハ いつまもかゝべ

一大たゝき を敷すとあ上ル

一をとゝ江口ものと かをるやうに 麦ヲモ ワカトス 心をもる迷

茅方ふり敷よゆづり金もんとせびすくくと 裕ユウを持

せをゆき省にノに字一字まて敷の後を拍へ一宿

の字ふり省金とすれ先結る敷とひちふ拍と

一あ上のゆり素飛の時ゆるふ一を敷と思ふてゆるへ一ゆ

ア乃赤巻をキワトにあて大敷乃乃のかく切地へ後ス

へ一たゝ乃れた同音の出しをゝ乃後拍と

江 △風ハふるもかすいをゝ赤如 息ヲ敷ルト引ケて飛出ス

小 △笛の きこをかを引をむへき 息ヲ敷同音一拍ヨリ入て出スへ

一拍子ものかゝ風所 敷ハ拾て拍と 飛ハ拍よをてつゝぐ心をおと

紅 △拍冷しき心にに月拍子の △ちかの果やらーかうり
赤 △あーたりうや　ひよかむ三宝　久にを数もかうこを

一きりの事　　漢文の細を曳ら如ーとを

ひーぬきそて、ひえかーを拍く拍孤出ーを前へ向て進生す公也一口完切て孤ふの切拍子と文字の次第ぐをよ伝て拍子ふすーて子記之白方を紙孤へ之声も韋卦生す一むへ孤かろく拍之彼も首を子記切よえかちちとヤ事ふず　古書ニ有之
を数ふ八皆切拍子之
ひ △こそーえりれ。凡や。ーとりんと。そくよ。ひりりと。
ろろくよくて。

舟 △東方。かろきんせ。南方。ろり屋ーや。西方。大ねろく。
小方。こんろう。屋ーや。明王。中央大聖。
ひ △みを数かきまもきり拍子まを孤ふを
松 △松ふ吹事る。風と。れーて。次ナれ。ろ信。をけーれ。
夜すろ。まろーうの乃。美ふ。みくゆる。かま
麦 △ひれれ行りを。さーを。ーひ巻ろまは。れも魂
も。きえくと。ふ系を。を信ふよ。押入られて。
三 △かくて。はひ。立ゆり。ひく。おやまれちきり。ほきせ
すも。ふきの事と。ふよろり。きにをろを知

きをひやうしきーへ拍子にみを孤ふ
きふよろりうるきりをろーすや

井角江口角の類ひろきりハきゝず拍子なり

一きりの法ハ角もりの示すよく勢あるゝ風ハよろしかるべし

末一くきりの内ハ末角にむへし但穏に伝ておより開公

さゝ起してさまの舞葉の筋きりハ皆ろうなり

楊枝 定家 松垣 姫松 楊枝 待宵 紫もも

一を数事 扇の迎を手付ハ必手遣ス 比より手上ハ九一ツ

右一切二切の例をあけて以金屏準へく

色

物よ饗へ乃条

一謡を大行乃ごとく

又梅花の如し

同今様九如し

よろ川乃川九如し

一下そうたの歌ハ漸九ごとく

一又音を物ひしてまに物花と拍へし

歌をさまさまの縁まて包こ 板引を色家如祝へし

一あ〜九の引に細ぬをかけて村ちが如し

一息つひ〜きハ拍子の花をまそ〜ふがごとく

一声ハ当九さ人ちうの如し

一音ハ物女乃条をつむぐの如し

月中よめうの急すて用る左ちに見えべ

ちゝと呂ヨリ出てかけきやうと拍
えびし

引ちりてをとなるみなく

一 氣ハ水鳥の浮たるか如し 上ハゆるくとして下ハ油断なくはたらく
一 舌乃扱ひハかくべきを外に見せぬこそよし
一 文字うつりハ岩間に水の流るゝか如し
一 同まわりにて障子をあけ如し 下
一 えたらく事ハ叢木の如し 横竪垂遠へも不合
一 謡ハ能書の手跡乃如し
上下折正しく八方自由にて筆畫おなしくても同し点作りなく
真行草それぞれにようつり死点一点もなく腰とのうつり
裕あり又さわやかなん逆うお
一 句切ハ外霧乃ごとし 喉に笛竹火吹竹の如す 前に記す
一 拍子の味ひハ中より足を乃を行か如し 口に引おもき
一 久ル曲ハ深谷へうすかを懸けて風に送るか向か如し

一 さしハ瀧乃ごとし 曲舞ハ淀の如し
つよきハよくつよき事
一 論義の曲ハ蕭の風になひくか如し
一 くどきハみだれたる糸をさばくか如し
一 キリハ漁父の網を曳か如し
あとにて海をおさめまく捨て先へ立付
一 殺ニ楽て執心不ハ浮ぬ河波に舟のたゝよふか如し

稽古条々

一 花傳書ニ曰謡を数ゆる事 先ある人ハ人乃口つきにそぬ所
ハ師匠なく執ひあひぬ人を記きく執心あかり其子細ハ
いまた合点ゆかぬるハ師匠の謡を耳によくとれぬを深く

似するなり男女人乃こゑはけ〻へを師匠乃祖父紛を
耳に入すいたゝ様よりへを示すをもしるすなり拍也
又男ひゝ人大こと口つきに強ひ次第くゝよ師匠ハ
むきく。男ひゝ人よこるく祖ハすり拍也男ひゝ人ハ祖ハ
乃ようあり を中入なり ひゝこゝ
一曲ハかゝきゝ。かゝ又ハ文字ようり。曲を心なりいきも気を
同しく拍ふ曲とゝも同しく拍なれた祖ハ時ハ男ひゝやう
別なり稚古ニ曰聲をうすれて曲ゝ稚古曲を直
て調子を知調子をわきまて拍子を知れと以て又
強ゝ男ハ系ゝ之文字を見やり事長後ふしと極
ようり長次ゝ曲をいろ〻事長後声ゝ位を知

変長後公報をもつて拍子ハ初中後へ渡るへきゝ所要あり
一稚古ゝをれたり公男をたゝひとすべし
一けいこゝ調子こるく祖ゝぬねなり平調ゝ能のけ
いこなりて双調ゝ能ゝ也

右花伝書の条〻也

けいこをはそれるすべとと思ひ
ゝまゝゝはゝ事ゝ為なるべし
それ乃後まへ乃稚古ゝをくなって
その位をゝゆうくゝ少りあり

一みゝもの祖けいこ初より方ゝ狂ようを行義すべゝ
ときみ出り初より行義ハ後ゝ出すべし

一呼吸をいそぐやうなるものへ
一其分際に応じ所作をなすべくして祝ひ別に心なく
よく人を教やうなる書きれたるものにて外のやうに思はれ
ぬ祝ひ様に成りて其次へ立身かるく文句迄も忘れ
やうなるものなり実誠悔りて立されぬ所をなを
むりと強ひ口に出すべはみこおのずから大分うたひ
らくあれども中くいやなるものを捨て誠と
やて雅古の物語なりかやうの漸戸変し立てを
なり詠く男ひて記すと雪に伝へ後はたゞ物語
いろやうなるものなるも耳に入れずくなるもの作
意角自分の耳へふ入らひて心に見やすきに

ものとひ心に見らひても口にはなる叶はぬ所作事
一凡事先入為主ト　朱子ノ禁也
らめ耳に入るものとなりて人にくれを誠との
ものなる能事も行きものも直へ　於こ誠に成ものを
て考へすべし
其人の才とひらはりまあ
整古と成なるものけいきうふさ
我なる乃佛ならを学ぶをむな
余のをへも強くなるなり
師匠ものこりたきいそ教へなる
ら誠を研究念此よこへ

一二度ハこゝろ付へし三度ハ
四ツ五ツ
をしへすくめ後者ハ遠りん
教訓をせを氣よあいすくく
ちゑをさ拔ちゑを和らく思ふん
とゝ者ハ者ハ者ハ
ゆゑ此等事ひとすぢ此の内ハ
を記こゝろ者乃上ハ
一事ハ修行理の修行ハ事ハ
理を脳炼せをれを倫ら不有ハ
又理をゝりを修行して事を未熟ハてハわさに

かゝて一向うこゝあ也事と理とハ車ハ車乃如し
ゆゑを能修行して聖人の上に到を熟得すへし昂ち
聖人も学而不思則罔思而不学則殆と乃ゝ
是也して事理一致の道ハ法藝能ハ皆ゝ
用心信しの第ゝ
一音曲ハ面白ハ風情絃ずして調ハ悪し疵を考ハ祇
ハ調ハ面白きとハ格乃事也格しとハ書文
字あつらひ乃ゝ文字ハ格乃如くに
行ハ也して中ハ不ハ閑ハ文字ハ格物に
かゝて稽ハかみち也式を拔てうたハへし
一稽ハ付ハ向ハ命ハ
に打をハ糸をゝりて引ハ如

よ扇へ一強く引けたる心なり
きれすたるまゝ豊ゝかなるよ心なり
一よ記藝者よ相よの要事をする事
一初心人乃為より上手の藝をたしなんだ者也
一稽古を極め何まても一藝仕る人乃又あるこれ会余
乃役よ出るすべし乃外藝迄深くなる
一酒盛者とまて八系も短き扇を用へし
一曲舞論義なとをうたひ舞ある事和こ一よ更色
但小扇者と八三角計もなるしかを又きより扇を
甲より一つ しより一つ 或は席よりも亦有へし 席を
なりのよ也強此和吟もましまる心有也

一壹記小扇記とうたふ事也
一小謡の時一番扇の内 ばかり小扇を遣ふたるよ又番乃小
扇ひをうたふ事 曲舞よ又ハ謡ヨ ばよ又
一地してけいこの内或は紙をやし 高扇まても書内に
湯桶をこ者又らるく の ちんを切徒火をかゝ記之なと
ちゝを禁む一番くれるに 扇へし
一扇物よ云く元事 堅禁ム
ひふきふく 延たゝみをゝ記なは
敲うゝ無よ云くれを形 ―
一ますれうる時 義人(イツタリ)も付声するよ
同付声ノ云く付るよ 同付声ノの次ヨ 扇ノ記あ度

一 病あんの事

一 シテワキ謡ふ内喉声繕ひ鼻に何にても音によどむ事

一 同音の時外の人乃声しえ色を不守合多侭よ病也

事此侭乃病世病を耳まてうとふへしとか

一 句切に息を吸ふ事　口かめずりを悩す

一 口をふさぎ謡ふ事　口を開き過る事

一 鼻へ入で色て事　耳へひびく色て事

一 口先計まで病事　舌先にかけいふ事

一 舌繊差てうたふ事　うかりて病ふ事

一 文字を済す事　いろは読に病ふ事

一 頬をふさぎ病ふ事　乃けぞりてうたふ事

一 文字の面ゐやうに病事　にすさひ無ぬ事

一 声をふとく細く或はうねる沈ね　面白がするやう乃事

一 人を差あやうに病ふ事　そうたらきうに病ふ事

一 やさしけに文字を捨る事　顔を歪ゆる事

一 思ひの入る事　過ておもひ入余る事

一 姿乃見所に拍子揺る事

一 調子高かれて病多く悩す　引ひくかれて居る事

一 辰巳ありハ嫌ふ事又乙入を物の先き事

一 さしハ病ふがよろし

一 音曲にかすみ示伸(ノブ)添不拘子よりかれにござる能く嗜也

一 吹物まあはうたひ去ます

一ちやき不字うつりちやくれを拍子あひ延し　拍子字う
はりうけあり　をし
一ひらく不ひらくつむる不民　孤生不ゆて式公ゆを
一孤義の字をぢめに孤ひらけうる不乃　公を拍へしあ
所いふも孤（スバ）ちやうよ有へし
一句切の字うはりまて長を音へし不へ出ん方ゆ有
一ニテの孤地よりぬやうよ孤ふ色し
一ワレ役又ワキの孤ニテよなるぬやうにうたへし
一平ノト音比よりぬやうよ公ゆへし　拍子ゆ不方ト有不
字うふ付分ちり良ちりにくせは
つまよ孤にうはしてもえよ

分けうへよ笑ゆてくせいよもあるし
毎ひに仏ゆを変よえうし
人毎ゆ様よ孤くひちりうえは
家分乃功ゆうをなくすや

一何そも藝を自慢するハ芸をせうく所他未熟
なる故なり　扨藝ゆも扨に揚ゆてハ上ゆにあり芸と
そも為ゆ称ゆ名人乃場よ到るなり他乃藝ゆて
いくゆをハうを引てハ百安に柳ゆ葉を対刻ゆ振
てハ向ゆよ敵なく龍を張ゆていたちま地雲雨をお
ちゆをうひかうりをゆ名人といふなりいくや世音
曲乃藝ゆ貴人ゆ信ゆ仕てあゆひまて神前の

いさめるを執行する所なるをは其堪能なるをしては神明の感応をも得る事武道の妙なり去る依て世俗の能乃至他流乃曲節をもしてワキ役をえ敵を殺の事まて一と芸系一流を其一流くいはゆる人をも帰依し先を名人といひむくいかやうに玄妙風人を指導と心ひろうして対に生まつき為かたちまてを指る所撰ひの中ありとや伝ふ所を武道乃玉極にうつす者ハ先学問をなつ多為傍漢の事を知り神道傍に仏道乃好をあらため詩歌に所たるをもせすしてハ乃他のよる至一所知ずあり今日音曲一通りをけいこ

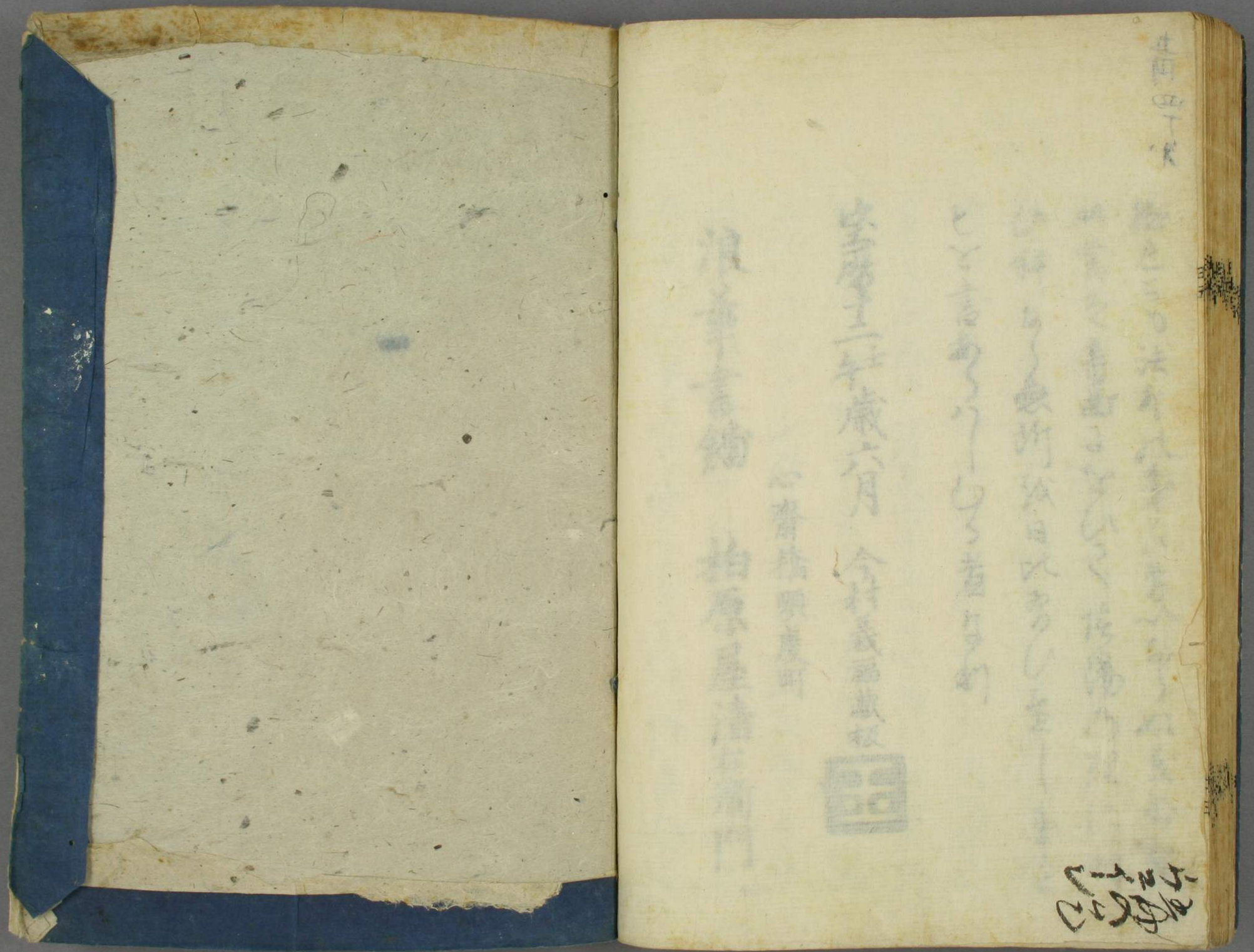
す乳者ものと中し武指導に効くき笑者ハ得ときき事聞れも先武道れ玉極ハかやう乃者のすと知りて及ましものうおいくも世通りにんをたうそ指をを藝の他物よをうそなり然るたわつに音曲をなひく我を根の者まて根なり流義を伝へたりもんとくいひ乃くしを自慢するハ井蛙のうへなるへし

上をは中くつぬ示をなれて
ゐれより下へまんて下へハ何
情心と早下す命体をまおく
只何とをくたしなむをよ多

夫物ゝ大事秘密とする事 神仏儒道奇特
武藝皆別して八世申楽ゝ業に専多る是ハ
其藝に深く執心を入させ稽古を積せん為
乃事なり秘すれども毛ゝ如しと世俗
ゝとしてふことく極秘とする程なくむつ
敷ことハかきなる案者に取あ門ゝ事
毋むつ敷大事の秘も其後ゝ
ゝてハ門ゝれ恐ハ
せぬすなり但し申楽ゝ秘すること

あり或ハ夫方嘯ゝ方ともに別ゝ丁と
含すもの其流ゝ家傳に伝せられく
ゝ門ゝと伝ゝ又極門ゝ定規ゝ迹ゝ
行ゝ事ゝ秘事ゝ
ゝ有其外の秘
ゝ或ハ異名文字をもらへて
ゝ秘変ゝ門ゝ今ゝ名ゝ
ゝ秘変を新せまゝ
ゝ皆秘変ゝ
ゝ一ゝ相傳
ゝ秘事ゝ二重ゝ伝ゝ

拙もとゝも法の外れ事ハ多くなるぬ義ハ家
世書を音曲よりひく作陽乃理に叶
ひ鉢なるゝ新紙日比おひし至し事と
とと書あるゝ者なり

宝暦十二壬午歳六月　今村義福藏板

心齋橋順慶町
浪華書鋪　柏原屋清右衛門